PK-2-32

認知症高齢者の誤嚥予防のための介入方法の検討
―先行期から口腔期に着目して―
Aspiration Prevention Interventions for Older Adults with Dementia
―Focusing on the Pre-oral and Oral Phases of Swallowing―

○濱本尊博 (OT)[1)]，田中マキ子 (NS)[2)]
[1)]学校法人　山口コア学園　山口コ・メディカル学院作業療法学科，[2)]公立大学法人　山口県立大学看護栄養学部

Key words: 認知症高齢者，摂食，嚥下，（誤嚥予防）

【序論】認知症高齢者は摂食嚥下過程において,先行期から口腔期の問題が指摘されており,嚥下障害がなくても食行動の異常により,誤嚥を生じると報告されている.認知症高齢者の食行動において,いかに誤嚥を少なくできるかが,誤嚥性肺炎予防の鍵となっているため,認知症高齢者の摂食嚥下先行期から口腔期に対する誤嚥対策が必要となる.先行研究において,作業療法士(以下,OT)は摂食嚥下プロセス先行期から口腔期への介入として,障害された機能の回復を図る介入や残存機能を活かす代償的な介入など様々な介入を行っているが,誤嚥予防を目的として行ったものはなく,認知症に対して行った介入は,報告数も少なく,詳しい介入実態が分からない状態である.

【目的】本研究では,認知症高齢者の摂食嚥下の先行期から口腔期の誤嚥予防のための介入実態を明らかにし,より良い介入方法を検討することである.

【方法】本研究は質的帰納的研究である.2019年5月から2019年9月にかけて,一般病院で働くOTを対象に半構造化面接による60分程度のインタビュー調査を実施した.対象者の選定指針としてOTの養成校は,専門学校や大学,短大などにより,就業年限が違うため,卒前教育によっても違いがあるのではないかと考え,養成課程として3年課程と4年課程に区分けした.また,臨床経験年数は,中堅と言われる10年目を境に考え,1年以上10年未満と10年以上に分けた.これらにより,分類された以下の4つに該当するOTを対象とした.対象人数は各4名ずつの16名で,縁故法を用いて電子メールまたは電話で連絡をとり対象者を選出した.「同意説明文書」を用いて口頭及び書面で説明し,同意の得られた者を対象とした.分析方法として録音したインタビュー内容から逐語録を作成した.認知症高齢者の摂食嚥下先行期から口腔期の様子に関する項目について,実践項目ごとに,前後の文脈に留意しながら文を抜き出した.抜き出した部分の意味内容を損なわないように要約し,コードを作成した.作成したコードを,類似性および新規性に基づき整理し,抽象度を高めてサブカテゴリーを抽出した.さらにサブカテゴリーを類似した項目ごとに整理し,抽象度を高めカテゴリー名をつけ,具体的な介入方法の内容がカテゴリーから抽出されるかを検討した.先行研究を参考に,認知症高齢者の摂食嚥下先行期から口腔期の様子に対する対処方法例を作成し,インタビュー調査から得られた分析結果と照らし合わせ,それぞれの介入実態図を作成した.本研究は,倫理審査委員会の承認を得たうえで実施した.開示すべき利益相反はない.

【結果】OTは,認知症高齢者の摂食嚥下の先行期から口腔期の様々な問題に対して介入している実態が明らかになった.また,OTとして食事に介入する上で,取り組むべき必要があると考えられる問題に関しては,どちらの養成課程のOTも達成できていたが,直接的に誤嚥に結び付く可能性がある問題では,介入できていない状態であった.認知症患者へ行ったOTの対処方法では10年以上のOTがほぼすべての対処方法を実施していたが,養成課程別では,どちらも完全に実施できておらず介入に大きな違いは見られなかった.

【考察】このことから,認知症高齢者の摂食嚥下の先行期から口腔期の誤嚥予防のための介入実態として,養成課程よりも臨床経験年数が大きく影響していることが示唆された.また,食事に対するOTの介入として,食事姿勢,自助具の適応,身体機能訓練などへの介入だけではなく,咀嚼や嚥下も含めた食事に対して,総合的にアプローチしていくことが重要であり,それには疾患の特性も理解した上での介入として,OTとしての対処方法が有用である可能性が示唆された.